



柔軟な思考力・論理力

前号で出口汪『東大現代文で思考力を鍛える』（大和書房、2013）という本を紹介したら、早速「その本買って読みました！」という人もいて、なかなか立派である。これから入学者選抜などもあって、多少時間の余裕ができたとしても知れないので、興味があったら手に取ってほしい。どんな感じか、ちょっと引用してみよう。2008年度の第4問（竹内敏晴「思想する「からだ」」）について紹介する部分である。

*

筆者は演出家で、問題文は演劇論にとどまらず、身体論になっている。また言語と身体について考察をする上での一助となる、優れた演劇論であろう。

言葉には願望実現力がある。だからこそ、私たちは言葉で祈り、言葉で呪詛する。だが、その言葉は一方では、人に幻想を与えることもできる。

権力者は政治家であろうと、宗教家であろうと、そうした言葉を巧みに操る人間である。たとえば、戦争であっても、必ず美しい言葉の下に行われる。権力者が「自分の欲望を満たすために戦争をする」などと言ったりしない。「平和」「正義」「祖国」「愛する人を守る」といった美しい言葉でもって、人殺しを肯定するのが戦争である。

人は言葉に酔いしれ、時には言葉のために人を殺したり、自殺したりすることができるのだ。

身体に根ざしていない言葉は、人をだますことはできても、人の心の奥底に届くことはない。「舌先三寸」「口先だけ」と、私たちは

その言葉の軽薄さを体験的に知っている。

さて、演技においては、役者の放つ言葉はどうなのか？ 台本に書いてあるセリフは同じであっても、役者がその言葉を身体で受け止めているのかどうか、筆者はそこで一流と二流との差が表れると言う。身体と言語の関係について考える上で示唆的な文章である。

*

以下、実際に出題された入試原文が掲載され、それに対する出口先生の解説、実際に出題された問題の一部、そして、その問題に対する出口先生の模範解答が掲載されている。

ちなみに、竹内敏晴さんのこの文章、来年星陵祭で役者をやりたいと考えている人は、読んでおくとよいかも知れない。読んだからといって演技がうまくなるかどうかは保証の限りではない（笑）が、まあ、「オレは（ワタシは）一流の演劇論を読んで演じているんだ（演じているのヨ）！」みたいな気持ちにはなれるかも知れない…？

*

出口先生は、「東大が求める「柔軟な思考力」と「論理力」の二つの能力が重要なのは、無論東大生に限った話ではない。「英語教育」の重要性が叫ばれて久しいが、いくら英語が話せたところで、上記の能力がなければ、それはただの「英語を話せる人」にすぎない。極端なことをいえば、それは「日本語を話せる人」と大差ないのである。日本語でものを考えることができない人間が、いくら英語が喋れても、それで国際人だとはとても言えない。」と別の箇所を書いていらっしやる。至極もつともなご意見である。